六歳の戦争体験　―朝鮮からの逃避行―

琴寄　學　（ことより　まなぶ）

私は 78 年前、6 歳の時、38 度線を徒歩で突破して、内地（日本本土）に引き揚げて来ました。
途中北朝鮮の元山で抑留され冬を越しましたが、発疹チフスの大流行に遭い、全員が罹り、生命力のある者だけが生き残りました。

亡くなった人は、凍土に浅く掘った穴に沢庵漬けのように埋葬されました。私達のように「身内を埋葬してきた人達が遺骨を取集したい。出来なければ、せめて墓参だけでも」と、「朝鮮遺骨取集全国友の会」が結成され、私も加入していました。けれども会員の方は高齢のため、次々と亡くなり、高知県では、早野朝子さんと私の二人だけになってしまいました。早野さんと、「ほとんどの人は朝鮮での悲しい出来事を何も語らず、お墓に持っていかれたので、残された二人が、その事実を伝える義務があるのでないか」と話し合いましたが、早野さんも令和元年 12 月に 87 歳で亡くなり、私だけになりました。

それでも、私は少しでも多くの方に、戦争の事、逃避行を少しでも多くの方に、戦争の事実を伝えたいと、この手記を書きました。
「六歳の時の事、よく覚えているな」といわれますが、祖母の旅館に突然乗り込んで来たソ連兵に乱暴された、旅館勤めの新婚のお嫁さんは、あおむけになったまま。祖父が必死で人工呼吸をした様子などは、脳裏から離れないのです。

まず、朝鮮民主主義人民共和国と呼ぶのが正しいのですが、長くなりますので、北朝鮮と呼ぶことをご了承ください。

私は、昭和 14 年（1939）7 月 7 日に満洲（当時）との国境の街、朝鮮咸鏡南道甲山群恵山鎮（かんきょう・なんどう・こうざんぐん・けいざんちん）で、生まれました。父、虎三は、栃木県佐野市上町出身で、大正 12 年（1923）12 月公務員の「警察官」として渡朝しました。昭和 5 年（1923）に実家が、恵山鎮で経営する「ふきや旅館」を手伝うため、渡朝した奈良県吉野郡十津川村平屋平谷出身の藤井はまのと、現地で結婚しました。私が生まれた時は警察官を辞め、大村という材木会社に勤めていました。第二次世界大戦が始まる時でしたが、とても恵まれた生活を送っていました。朝鮮で育ちましたので、少しは韓国語が、分かりますかと、よく問われますが、全然わかりません。それは、当時朝鮮は日本に併合（明治 43 年、1910）されて、朝鮮の人達は、日常は日本語で話していたからです。朝鮮半島の人達は、日本以上に日本国に対する義務を押し付けられ、また昭和 14 年（1939）12 月からは、日本風に名前を、創氏改名令で改名させられました。

日韓併合は、「インフラの整備・農業発展・両班制度の撤廃・識字率の向上などで、間違いはなかった」との意見の方がおられます。しかし昭和 11 年（1936）の第 11 回ベルリンオリンピックで、日の丸をつけた孫基禎さんがマラソンで優勝して、日本人は大喜びでしたが、その時、朝鮮の人達はどんな思いだったでしょうか。

もし我が国が、どこかの国に併合されたらどうでしょうか。私は命を賭けて戦います。日本が朝鮮

半島を併合して、思い上がったことが、太平洋戦争へと突き進んでしまった最大の過ちだったと、私は考えています。

戦争中は、何不自由のない生活でしたが、昭和 20 年（1945）になると、召集令状が 45 歳までとなり、復員していた叔父たちにも、召集令状がきて、ほとんどの大人の男性はいなくなり、（根こそぎ召集・動員）、そしてお前達を守ってやると威張っていた、警察や軍の偉い人やその家族が知らぬ間にいなくなりました。

昭和 20 年（1945）8 月 15 日、日本はポツダム宣言を受諾して敗戦となりました。敗戦から日を置かずして、ソ連軍が旧満洲方面から恵山鎮に進駐してきて、祖父の「ふきや旅館」は共産党本部の看板が掲げられました。ソ連軍の先発部隊は、スキンヘッドの囚人部隊で、腕時計が扱えないほど教養がなく、また凶暴でした。

9 月になり、「日本人集まれ」との命令で集まると、今から内地（日本本土）に返してやると、無蓋車に載せられました。汽車は動いたり止まったりの繰り返しで、なかなか進みません。止まった時に小用のために降りた女の人をみました。汽車が急に動き出し、何人かの女性が取り残されました。
また目の悪い祖父は杖を取り上げられ、枯れ枝を杖代わりにしていた姿や、ソ連軍に乱暴されて時にと、（ソ連軍には慰安婦制度がありませんでした。それで多くの日本の女性が犠牲になりました）持っていた薬（青酸カリがなく、猫いらず持っていたのです）を飲んだが、水が無かったため、喉でやけて身体全体が風船のように膨らみ、それでも内地に帰りたいと、私達に必死で付いてきていた祖父の旅館に勤めていた若い女の人の死姿などが。今でも私の脳裏に焼き付いています。

私達は北朝鮮の元山という駅で突然降ろされて工場の倉庫のようなところに押し込まれ、避難民となり、地獄の 8 か月が始まりました。20 年 9 月中頃、スターリンが「日本人を動かすな、との命令を突然出したからだ」と思われます。

日本政府から見捨てられ棄民となったのです。終戦直後の日本本土でも、多くの方が飢えに苦しんでおり、餓死する人もおりました。そこに、660 万人（軍人を含めて）の方が外地から帰国すると、大変な食糧危機になると、日本政府は帰国事業にあまり積極的に取り組んでくれませんでした。

まず、食べるものがなく飢えの続く日々でした。草や木の実など食べられる物は何でも食べました。海で蛤が獲れたので、必死に捕って食べました。北朝鮮の故金正日総書記は、平成 14 年（2002）9 月、日本人 13 名の拉致を認め、蓮池さん、地村さん夫妻と曽根ひとみさんの 5 名は、日本に返されましたが、横田めぐみさんら 8 名は、すでに死亡したと発表されました。その中で市川修一さんは、元山の海水浴場で溺れて亡くなったとのことですが。元山の海は 6 歳の子供でも貝が採れるほど遠浅です。なぜ、あの海で若い男の人が溺れたのかと不思議でなりません。

朝鮮の冬は零下 30 度近くになります。夏服の着の身、着のまま、避難民となった私達は、発疹チフスの猛威に襲われました。まず猫いらずを飲んだ女性、祖父、叔母、従兄、そして父と。

私達の一団で 9 名が元山で亡くなりました。祖父が亡くなった時、額がシラミで黒くなっていました。亡くなった人は、凍土に浅く掘られた穴に何人も放りこまれ、タクワン漬けのように埋葬されました。私の父は、元警察官であったことがばれ、保安隊に引っ張っていかれました。、間もなく昭和 21 年 3 月 3 日に亡くなりました。

私は、今でも、父の死亡はその時に受けた拷問のためだと、思っています。女の人達はソ連兵に襲われないようにと、みんな、頭をそり、顔に墨を塗って男の恰好をしていました。私達子供は、石炭の燃え殻の中から、まだ燃える物を拾ってくるのが仕事でした。南朝鮮の京城で復員した叔父が、私達が元山で抑留されている事を知り、聾唖者の朝鮮人に化け、寝る時に寝言を言わないように

口に新聞紙を入れて38度を超えて助け出しに、来てくれました。そうして昭和21年4月5日に元山を脱出しました。白岩山越えの60里（240km）。私達以外のチームの方ですが、氷池の中落ちで生き別れをする人、朝鮮人から叩かれて崖から落ちる人、膨れ上がった足で這うように歩いている人、取り残される子供たち、などの光景が記憶にあります。38度線突破で必死の行程で頼れるのは、自分の足だけでした。私たちは、10日間かかりで、4月15日に38度線を越えました。

北朝鮮には約 30 万人の日本人が抑留されており、朝鮮も食糧難です。日本人を追い出したいが、スターリンの命令で動かすわけは出来ません。それで、山道を使用することを黙認したのでしょうか。しかし、持ち物は、全て奪われました。

38度線より南は、天国のようでした。京城を経由して4月25日に釜山を出港、4月26日、無事山口県仙埼港に着きました。引揚船の中で食べたさつま芋の美味しかったことは忘れません。

また、夢にまでみた内地を目の前にして、引揚の際に受けたソ連兵からの恥辱に堪えがたく、船から身を投げた女性が居ました。けれども、飢えに喘ぐ私達に、そっと食べ物を差し入れてくれた、ｵﾓﾆｰ（朝鮮人のおばさん）。ﾀﾞﾊﾞｲ（下さい）、ﾀﾞﾊﾞｻｲと物乞いする子供達にやさしく黒パンを投げてくれたソ連軍の若い将校など、助けてくれた人達も多くいたのも事実です。

私達の家族は叔父たちと別れ、父の故郷、栃木県佐野市に向かいました。そこには父が購入していた大きな家屋がありました。しかし母はお嬢さん育ちで、父の実家の農業を手伝うのは無理でした。

そこで家屋を処分して、十津川の本流熊野川の河口の町、和歌山県新宮市に、叔父を頼って引っ越しました。そこで新宮市で高校卒業までに 11 年間育ちました。私はとても良い子でした。「子供の日」には、新宮市長より善行児童、模範児童で何度か表彰されました。

それは良い子にしていれば、近所の人や友達の父兄が、かまってくれて寂しさを紛らせることが出来る事が自然に身についていたからです。本当に良い子であったか疑問です。弁当を持っていかない日もある小学生でした。引き揚げの無理が立ったって病弱な母、父のいない引揚者、貧しいのは当然です。私が6年生の時、昭和26年に硬いパンだけの給食が始まりました。

けれど 4, 5 年生で弟や妹の子守をしながら登校する女の子がおり、授業中に泣き出して赤ちゃんを必死にあやしながら、教室を出ていく姿を、今も想い出して涙がでてきます。

しかし昭和 25 年（1956）に勃発した朝鮮戦争で、日本は漁夫の利を得て（朝鮮特需）、経済的に恵まれだし生活が徐々に豊かになって行きましたが、それに取り残された中学生の時が、私が一番辛かった思いが残っております。生活保護はまだなかったので、生活費は父の恩給と 8 歳上の働きでした。母は結核で医療扶助を受けていました。この時期の私の様を、もと毎日新聞社高知支局長の大澤重人さんが、季刊高知（2021 年 12 月号）に記述してくれました。母は昭和 30 年（1955）2月8日、私が中学3年の時に亡くなりました。私は小中学生の時は父を恨んでいました。それは，生むだけ生んで死んでしまった。それでも引揚の途中、病死するなど格好が悪い。どうせ死ぬなら、特攻隊などで格好よく死んで、靖国神社に祀られて欲しかった。それなら胸を張って父の死を話せるのに、また 8 月 15 日の終戦記念日に、なぜ戦没者として扱われないのか、との怒りがいつも湧いていました。高校生の時、私の家庭の事情をよく知っている高木先生が、「琴寄君、君のお父さんは、戦死者だ、戦争で死んだと胸を張って言いなさい」と言ってくれました。それ以来、私の父は、「戦争で亡くなった戦没者」だと言っており、誇りに思っています。高木先生は恩人です。高校は奨学金とアルバイト（新聞配達と家庭教師）でどうにか卒業しました。

私は、社会に出て 67 年になりますが、その間、高度成長期で恵まれたためか、苦しかった思い出はありません、それは小学時代の苦しみに勝る苦しみが無かったからだと思います。小学校時代の担任の先生は新婚さんでしたが、よく自宅で食事をさせて頂きました。遠足の時など、何人もの同級生の父兄が琴寄君の分と、弁当を持たせてくれました。近所の方にもお世話になりました。

孫達と共に玄関先にて

そこで、私は少しでも少年時代に受けた御恩を社会に返したいとの思いから、退職後民生委員児童委員をひきうけていましたが、定年になり退任しました。私の時代とは異なる事情で苦しむ子供がおり、力になりたいと思いながら、個人情報の保護などで、少しも力になれませんでした。本当にもどかしいです。

昨年 2 月 24 日、突然ロシアがウクライナに侵攻を始めました。何故か。私は、ﾌﾟｰﾁﾝ大統領は気が狂ったのではないかと思えてなりません。しかし、ロシアの人々90％がﾌﾟｰﾁﾝを支持していると報道されています。ロシア人は鬼なのでしょうか。しかし、私は 78 年前、ロシア（当時ソ連）の若い兵隊さんに助けられた思い出が心に残っています。北朝鮮の元山で抑留された時、ぼろ靴を履いていたら、見かねたソ連の若い兵隊さんが、立派な支那(ｼﾅ・中国)靴をプレゼントしてくれました。その靴の御蔭で、38 度線を突破することができました。また姉（当時 11 歳）が汽車で脱出を試みて失敗して遠く離れた駅に、ひとりだけになりました。その時、ソ連の兵士が苦労して姉を、家族の元に送り届けてくれました。
姉は、ソ連に行って、若いﾊﾞｰﾋﾞｮﾝという兵隊さんにお礼を言いたいと言い続けていました。

ウクラナでは多くのロシア兵が、戦死しています。また世界中でロシアの人達は、白い目でみられ、肩身の狭い思いで暮らしていると思います。これが全体主義の恐ろしさです。日本は自由で民主主義の素晴らしい国家で、今は平和が続いていますが、世界の様相が随分と変化しています。日中友好との言葉を耳にしなくなりました。戦争をしない国。されない国であり続けるためには、どうすればよいでしょうか。日本人は平和ボケだと言われますが、今こそ国民一人一人が平和を維持するため、どうすれば良いか、真剣に考えることが必要な時ではないでしょうか。

最近の新聞に世界の難民が 1 億人を超えたと書かれていました。私は内地（日本本土）に帰るのだという希望があったから、朝鮮の 38 度線を超す生活に耐えたのです。行き場にない難民の人々の苦しみは、あの時以上だと思います。一番悲惨なめに遭っているのは、何の罪もない子供と女性です。

私は子供達に平和について話す時、人にはいろいろな考えや意見がある。多くの人の意見・考えを聞いて、その中から自分で決めなさい。絶対に一つの考えに偏らないようにと、はなしています。

高知市横浜西町　18-6　携帯電話 090-4508-2409

転載（季刊高知、2021 年 12 月発行）

「10 円の卵」

元毎日新聞高知支所長　大澤　重人

人目を避けて山道を主に歩き、朝鮮半島の 38 度線を突破した。240kmもの長旅だった。「えらかったね、強かったね」 母は目に涙をため、4 人の子をねぎらった。

帰国後、高校卒業まで、和歌山県新宮市でくらした。ゼロからの生活は、引き揚げ以上に大変だった。亡き父のわずかな恩給に加えて、病弱な母の代わりに8歳上の姉が働いて一家 5 人の生活を支えた。

小学校のとき、木下サーカスが近くに小屋を立てた。歌手の美空ひばりが映画で乗ったという象が目玉であった。「金が無いから行けんのですよ。幕間にテントが開くと、なかが一瞬見えた。それを楽しみに何日か通っていたら、近所の人が「學くん、見に行きやれ」とお金を渡してくれた。

戦争でどん底に落ち込んだ日本経済が、朝鮮戦争（50 年～53 年）による朝鮮特需で息を吹き返す。中学になる頃,父子でピクニックにゆく家庭が出てきた。そんな姿が少年の心を傷つけた。追い打ちをかけるように、母まさのが結核を患い、寝込みがちになった。「近所の掃除の手伝いをしてあげたら、奥さんが 10 円をくれたんですね。おふくろに卵を買うてやろう。10 円を持って八百屋さんに行ったんです。でも何軒行っても 10 円の卵はないんですよ。12 円か 13 円か 14 円なんですよ。そうや、峠に同級生の家族がしとる八百屋さんがある。行ってみたんです。おばさんに『10 円の卵ないいん？』 ときいたら、察したわけですねえ。『あるで、あるで』。14 円の中から一番大きのを新聞紙に包んでくれて、その卵を宝物のようにして持ち帰って、おふくろに食べさせてあげました」

愛する母は中学校 3 年のときに帰らぬひととなった。43歳の若さだった。

琴寄さんは、新聞配達と家庭教師をしながら高校を卒業し、大阪の建設会社に就職した。

「社会人になってからは楽でした」 高知に転勤後、地元の会社に移り、定年まで勤めあげた。今は、ボランリアで高知市の観光ガイドをしたり、引き揚げ体験を小学校などで、はなしたり。周囲の優しさに救われた少年時代の恩返しのつもりだ。

今も日曜日に、妻とスーパーに出かけるが、卵の値段に自然と目がゆく。あのとき握りしめた『10 円』の感触を懐かしみながら。

（朝鮮の避難の部分を省略：編集：大野正夫）

アルバム

2020 年令和 2 年 2 月 27 日、高知県高坂学園生涯大学K組で六歳の戦争体験を語りました

2018 年平成 20 年 10 月 7 日、高知市横浜グリーン団地で紙芝居（絵は早野朝子作）を交えて、六歳の戦争体験を語りました。

高知市横浜保育園で、戦争の紙芝居「かわいそうなぞう」を演じ、その様子がNHKで放映。

2019 年（令和元年）10 月 11 日にNHKの「こうちいちばん」のインタビューで、私の北朝鮮から引き揚げを放映。

自宅でインタビューを受ける様子。

その時のテレビ画像